

敦煌本『壇經』の形成

伊 吹 敦

はじめに

『壇經』が、「中国禪」の基礎が据えられた、正にその時代に成立し、しかも、それ自体が、その誕生と密接な関係を持つものであったことは疑いようのない事実である。従って、その形成過程を辿ることは、初期の禪宗史を明らかにする上で、避けて通ることのできない重要な課題であるといえよう。

それゆえ、従来から、この問題に対して、数多くの意見が提示されてきたわけであるが、残念ながら、時とともに議論百出するばかりで、定説に達するには程遠い状況である。

私も、近年、この問題に取り組み、一応の結論に達したので、ここにその一部を発表するはこびになったが、異説を一つ増したにすぎないのではないかとの虞れは拭い切れない。識者の御批判を請う所以である。

問題の所在

先ず、『壇經』の成立について、次の二点を確認しておきたい。

- 1 諸本の中で最も古い形態を伝えるものは敦煌本である。
- 2 その敦煌本ですら、幾度かの増広を経た後に成立したものである。

これらについても、実は異論があるのだが、前者は大方の学者の認めるところであるし、後者についても、敦煌本に、呼称の不統一、同じ表現の繰り返し、内容上の矛盾、不自然な構成などが見られることからすれば、疑いようのない事実といえる。

従って、我々が成すべきは、原『壇經』の成立と、それが増広されて敦煌本に至った過程を明らかにすることなのであるが、その際、それと關聯させて考えるべきは、従来から問題にされている以下のような諸点である。

敦煌本『壇經』の形成（伊 吹）

- 1 敦煌本『壇經』には、神会の著作とパラレルな表現が多く見える。
- 2 鷲湖大義の碑文に、神会の弟子たちが『壇經』の伝授を行っているという記載がある。
- 3 『壇經』を改竄したとして、南陽慧忠が「南方宗旨」を批判したとする記載が『伝燈錄』に見える。
- 4 敦煌本や恵昕本系の『壇經』の末尾には、それが悟真の系統で伝受されたことを示す系譜が書き込まれている。

つまり、敦煌本の成立に関わった可能性のあるものとして、神会の系統（以下、「神会派」と呼ぶ）と悟真の系統（以下、「悟真派」と呼ぶ）が考えられるわけで、それらが、数次にわたると考えられる『壇經』の増広といかに関わったかを明らかにすること、並びに、それらと「南方宗旨」との関係の解明が是非とも必要になるのである。

研究方法

以上で、極く大雑把ではあるが、問題点は明らかにしたので、次に、それらを解明するための方法について少し考えておきたい。

上に触れたように、これらの問題については、これまででも多くの人が発言を行っており、百家争鳴の感すら抱かせる状況なのであるが、このような状態を終わらせ、定論を形成す

るためには、極力、個人的な思い込みや不毛な水掛論を排除するとともに、共に議論を行えるような共通の土台が何らかの形で提供されなくてはならないであろう。

そこで、私は、次のような方法を提起したいと思う。

- 1 敦煌本の本文を確定し、全体構成を視野に入れつつ、従来の科段を見直す。
- 2 成立を考える場合、それ以上分けて考える必要のないものとして、「構成単位」という概念を導入し、各科段の内容を分析し、それらを構成単位に統合、あるいは分解する。
- 3 そこに含まれている用語や文脈に基づいて、各構成単位間の関聯を、できうる限り客観的に把握する。
- 4 敦煌本の標題や契嵩の『壇経賛』など、『壇經』の古形を窺わせる資料と対照しつつ、個々の構成単位をいくつかの成立階層に配分する。

研究結果

上に提示したような方法論に基づいて、私は、実際に研究を行ったわけであるが、その作業の過程は甚だ繁雑であるから、とても、詳しくは紹介できない。ここでは、ただ、行文の必要上、その結果のみを極く掻い摘んで述べておこう。

先ず、私は、スタイン本、敦煌博物院本、北京本に基づいて、敦煌本『壇經』の本文を校訂しなおすとともに、それを

六十七段に分割した。

次いで、それらを統合・分解することによって、a～z、A～Eの三十一の構成単位に纏めた。

更に、その内容の分析と、諸資料との対照によって、最終的に、下段に掲げる図のような結論を得ることができた。

原『壇経』と敦煌本の成立

この図から知られるように、私は、先ず、原『壇経』があつて、それに数度に及ぶ増広が施されて敦煌本が成立したと考えるわけであるが、ここで問題になるのは、その原『壇経』の素性であろう。

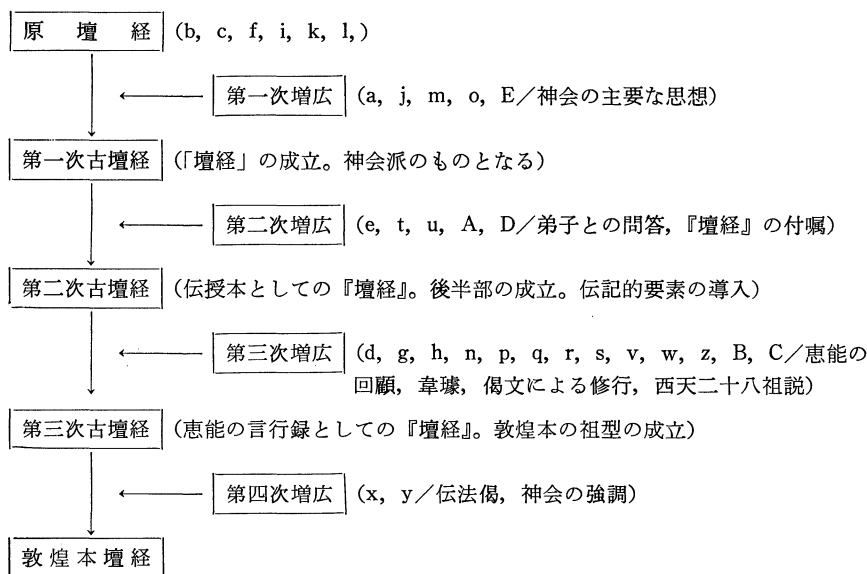
ここで注目すべきは、上のような方法で分離した、この原『壇経』には、次に掲げるような、極めて特異な点が指摘できるといふことなのである。

1 神会の著作とバラレルな部分が全く存在しない。

2 神会の著作や、敦煌本『壇経』の他の部分で否定されている「観心」が、ここでは肯定されている。

このことは、原『壇経』が、神会やその弟子たちの与かり知らぬ所で先に成立していたことを窺わせる。従つて、私は、原『壇経』は、それ自身の言うように、韶州の大梵寺における慧能の説法を弟子の法海が記録したものであったと見做して差し支えないと考える。そして、それが、やがて神会の弟

敦煌本『壇経』の形成（伊 吹）



子たちの手に渡り、自らの思想をそれに盛り込むために、大幅な増広が施され、遂には敦煌本の成立を見たのである。

これは、敦煌本そのものから導き出された結論なのであるが、これを傍証する資料が外に存在する。即ち、神会派の資料を分析することによって、彼らがある時期になって初めて『壇經』の存在を知ったらしいことが推測できるのである。

即ち、石井本『神会録』の「六代の伝記」の慧能伝と『歴代法宝記』のそれが同一の資料に基づくものであることは明らかであるが、細部を較べるとかなりの相違がみられ、しかも、『歴代法宝記』のほうがより古い形態を伝えていると見做しうるのである。

つまり、元来、神会派内で伝承されていた慧能の伝記は、『歴代法宝記』のごときものであったのであるが、ある時期に書き換えられて、今日、「六代の伝記」として伝えられているようなものになったと考えられるわけであるが、ここで問題なのは、この際、慧能から神会の出現を予言する懸記を聞き出すという重要な役回りを演じる弟子の名前が、「玄楷、智海等」から「法海」に改められているということである。このような改変をわざわざ行ったについては、恐らく、そこに「弟子法海集記」とされた『壇經』の存在があったと考えざるをえないと思われる。そして、敦煌本『壇經』に、この懸記の一節が書き込まれ、その相手が法海とされている

のは、まさに、これと呼応するものといえるのである。

ところで、このように、神会派の人々が、大幅な増補を行わざるを得なかったということは、それ自体、神会を経過した後の彼らには、原『壇經』に伝えられた慧能の真の思想が、とても満足のいくものではなかったということを雄弁に物語っている。このことは、自らの思想の起源を師の慧能に帰そうとする神会自身の主張にも拘わらず、その思想の多くが、実は彼の独創であったことを強く示唆する。そして、彼の弟子らによる『壇經』の増広は、彼らにとつての理想的祖师像を形成する試みであったとも言えるのである。

悟真派と「南陽慧忠国師語」について

最後に、残された二つの問題、即ち、悟真派との関わりと南陽慧忠の言葉との関係について触れておかなければならぬ。

まず、前者についてであるが、ここで先ず確認しておかななくてはならないことは、悟真派の存在を窺わせるものが、敦煌本や惠昕本系諸本の末尾に附された系譜以外には、一切、存在しない、ということである。このことが悟真派の実在性を極めて危ういものとしていることは疑う余地がない。

しかし、とりわけ重要なものは、惠昕本系の諸本が提起する問題である。敦煌本に神会系の思想と悟真派の系譜が書かれ

ているということについては、從來なされてきたように、兩派が『壇經』の形成に関わった時期に相違があったためとして理解することができるかもしれない。しかし、問題は、この兩派の関わりが、敦煌本から惠昕本原本に至る過程においても同様に認め得るということなのである。即ち、神会の出現を予言する懸記において、敦煌本が「有人出来」とするところを、惠昕本系諸本は、わざわざ「有一南陽真人出来」に改めて、それが神会であることを強調している反面、末尾の系譜においては、系譜の延長を行い、悟真から更に円会へと一代余計に伝えられたことにされているのである。

このことは、もし、神会派と悟真派が実在したとすると、敦煌本が同時にその兩派によって伝持されたという不可能な結論を導くがゆえに、そのいずれかは存在しなかったと考えるを得ないのである。そして、神会派の実在とその『壇經』への関与が否定できない以上、悟真派の実在は否定せざるを得ないことになる。

では、この系譜はいかなる意図をもって神会派の人々によって書き込まれたのであろうか。恐らく、それは、伝授本を装い、「秘本」とすることで、その価値を高め、逆にそれを流布させようと計ったのであろう。実際、敦煌本系の諸本が、中国本土でかなり流布していたこと、それが、日本や朝鮮、中央アジアにまで伝えられたことは、種種の資料によつ

て疑い得ない事実なのであるが、それが真に秘本であったとすれば、このような流布は、絶対に考えられないことであろう。従って、従来の説は、全て、この系譜を事実として扱ってきたのであるが、それは正しくないと言わねばなるまい。「南陽慧忠国師語」についても、從來、全く無反省に、それがあたかも、そのまま史実を伝えるものであるかのごとく扱われているが、私の考えでは、この言葉は、禪の諸派間の対論の中で、ある一派が、敦煌本『壇經』そのものを標的にして、その思想を批判するために創作したもので、「南方宗旨」とは、敦煌本末尾の悟真派の系譜から導き出された影法師の如きものに過ぎないであらうと思われる。

むすび

以上、敦煌本『壇經』の成立に関する私見の概略を述べた。紙幅の関係で、その筋道と結論を述べるに留めたので、分かりにくい部分や根拠薄弱と見える部分が多々あると思われる。それらの点に関心をお持ちの方は、是非、「アジアの文化と思想」第四号所載の拙論を参照して頂きたい。

〈キーワード〉『六祖壇經』、神会、慧能、南方宗旨

（東方研究会専任研究員・日本学術振興会特別研究員）